

中央審査会特別賞（優秀賞）

人々の生活と水

インド

ニューデリー日本人学校 一年

佐藤 美瑛紀

私は約一年前に父の仕事の都合で南アジアにあるインド共和国の首都ニューデリーに引っ越した。

私が住むインド共和国には、有名な川であるガンジス川がある。インドの人々にとってこの川は、生活の水であると同時に、信仰の象徴でもある。

朝日が昇りはじめるころ、ガンジス川は多くの人で賑わっていた。その岸辺には、多くの人が集まり、手を合わせて祈りを捧げている。川から立ちのぼる水のおいと、朝のひんやりとした空気が混ざり合い、そこには独特の雰囲気があった。

人々はゆっくりと水に手を入れ、顔を洗い、あるいはその水をすくい上げて空へと返す。その動きのひとつひとつには、長い年月をかけて受け継がれてきた意味が込められているように感じられた。単なる習慣ではなく、生き方の一部のようにも見えた。

私にとって水は、これまでただ生活に欠かせない存在だった。飲み水として、料理や手洗いのために使う、当たり前なものだ。しかしこの場所では、水はそれ以上の意味を持っていた。人と神とをつなぐもののようになさえ感じられた。日本とは違う文化や宗教により、ガンジス川は「神聖な川」とされていた。

しかし同時に、私はインドの水の現状についても知っている。都市の急速な発展や人口の増加により、川や地下水の汚染は深刻になっている地域も多い。本来なら人々の生活を支えるはずの水が、十分に安全とは言えない場所もある。それでも、人々は水とともに生きている。ガンジス川もそうだ。決して川の水が綺麗だとは言えない。工業排水、ゴミ、下水道の未整備による汚水の直放、さらには遺体や火葬の灰が流されることで、世界で最も汚染された川の一つとなっている。水を飲めば、病気になるリスクもあり、衛生環境は非常に悪い。

けれど、川の水が綺麗でなくても、人々はそこに迷いなく触れる。その姿を見て、私は不思議に思った。なぜ人々はこの水に、この川にこれほどまでに祈りを託すのだろうか。

しばらく考えているうちに、少しだけ分かった気がした。水はすべてを受け入れ、そして流れていく。悲しみも、後悔も、言葉にならない願いも、何もかもを抱え込みながら、それでも止まることなく流れ続ける。その水の姿は、人々にとって救いのような存在なのかもしれない。日本にも「水に流す」という慣用句があるように、人々は水に触れることで、自分の心の重さをそっと預けるのだと思う。そして同時に、水に対して感謝と祈りを捧げているのだろう。

流れ続けるガンジス川について考えながら、私は思った。水とは、ただ命を支えるものではなく、人の心に寄り添い、祈りを運ぶ存在であるということ。水は単なる資源ではなく、日々の生活を支える存在として、人々の心の中に深く根付いているということ。それと同時に、その水を守っていくことも、これからの時代の大切な課題なのだと感じた。水と出会っていくことで、異なる文化の中で水に対する向き合い方を知ることができた。日本とインドの水との関わり方と比べると、その違いはとても大きい。しかしどちらが正しいというわけではなく、それぞれの土地の歴史や文化の中で形づくられてきたものなのだと感じる。これからは私は、水と人との関係について考え続けていきたいと思う。ふと、窓の外を見ると、「人々の生活」と「水」の関わりを一番近くで知ることができる、インドの景色が広がっていた。